

長崎の都市形成における住環境の構造と 都市の発展及び継承に関する研究

— 中世の都市と住空間 —

佐々野 好 継¹⁾, 山 下 恭 徳²⁾

A research on the structure of the living environment, and on the
development, the inheritance of the city in Nagasaki
—dwelling space in the Middle Ages—

SASANO Yoshitsugu¹⁾, YAMASHITA Yasunori²⁾

1. はじめに

2021年、長崎市は、長崎開港450周年を迎えた。長崎市は、観光都市として歴史的遺産が存在する都市である。その都市の成立は、中世にさかのぼる。具体的には、長崎開港時が都市の誕生とされている。

1571年（元亀2年）、岬の高台に出島六町と岬の教会が建築され、ポルトガル船が入港する。当時の港は、海に突き出た岬の先端部の西側に設置された。

その後、長崎は港町として、貿易を中心とした商いが行われた歴史を有し、都市形成は内町、外町と発展した（*1）。

いかにして、長崎の都市形成は成立・発展してきたのか。現在においても街路や住空間には、その形跡が継承され随所に見られる。

では、長崎の都市形成は、自然環境や時代の経過とともにどのように発展や継承が行われてきたのか。

ここでは、当時の住環境を示す絵図としての『寛永長崎港図』を貴重資料として、主に町屋、街路、公共空地の視点から中世の都市にみられる住環境の構造を明らかにすることを試みる。

2. 中世における日本の町屋

日本の中世における町屋に関する基本文献に『日本建築史序説（*2）』や『日本人の住まい—住居と生活の歴史（*3）』などがあげられる。『日本建築史序説』では、「中世における都市庶民住宅は、奈良の例でみると、間口3メートルぐらいのものが多く、ごく小規模だったことがわかり、京都のものも、洛中洛外屏風によると間口は2間、奥行2間のご

1) 長崎大学人文社会科学域（教育学系）

2) 長崎大学生命医科学域（歯学系）

く小さなものに過ぎなかった。

しかし、これらも、敷地の間口は狭くとも、奥行きはあり、道路で区画された一ブロックの中心には空地を多く残していた。」と記述されている。

また、『日本人の住まい (図1)』では、「中世の町屋は、絵巻物や文書で見ると、間口も2〜3間、奥行も同じくらいで、村のふつうの農家に比べてやや小さい。建物は農家と同じく掘立て柱で、土間と居室部からなっている。」と記述されている。

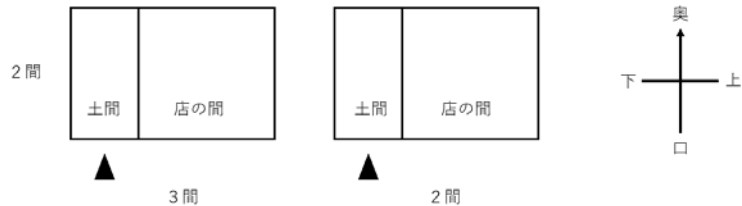


図1 中世の町屋

以上より、日本の中世における町屋の間口・奥行きは、①2間・2間、②2間・3間、③3間・2間、④3間・3間の4タイプがあったと考えられる。

また、町屋の住空間は、土間と床上で構成される一間型であったと考えられる。

3. 『寛永長崎港図』(図2) (*4)

寛永時代(1624年-1644年)における港町・長崎を描いた絵図に『寛永長崎港図』がある。それには、当時の長崎の町並みや自然地形などが描かれている。

これによると長崎の町は、中央部に描かれた内町と外町で構成されており、内町は白色、外町は赤色と識別されている。なお、出島六町は、内町と同じ白色で表現されている(*4)。

出島六町・内町・外町の主要な道路は、長い岬の稜線を基準に構成されており、その奥には諏訪神社が描かれている。

また、出島六町・内町・外町の周辺環境は、山と海が明確に描かれており、波止場や、外国船の旗も描かれている。

港の設置場所は、都市の発展と大きく関わると考えられるが、地理的位置関係でいうと、三方に山、前方に海で描かれている。岬の先端の左下部に設置されている。

その波止場のある内町(出島六町)には、1・2・3の堀があり、1の堀と2の堀の間には奉行所跡が描かれている。また、岬の軸線と交差する横軸の道路が成立し、内町と外町を含めた都市(市中)全体を4分割した時の交点(中心点)に奉行所跡が位置している。

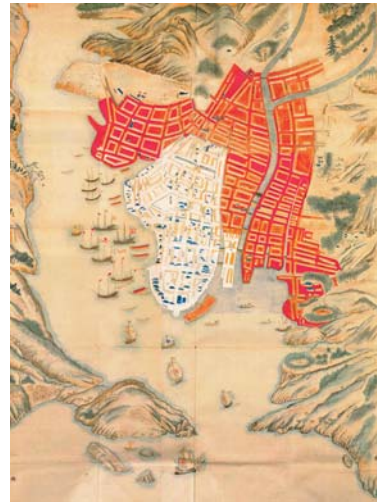


図2 寛永長崎港図

さらに、まち全体を4分割した交点は2の堀と3の堀の間に存在し、この地点は都市の発展と関係がある。町屋の入り口面、いわゆる土間の位置と街路との関係も推定される。

内町から発展した外町には、中島川・眼鏡橋が描かれており、出島六町・内町の主要な道路と交差する形で横軸の街路が構成・発展している。

中島川流域や小さな入り江を隔てた対岸の斜面地などは、いずれも古くから田地や畠地であったと推測される。

さらに内町・外町（市中）の重要な交差点（結節点）は、眼鏡橋のある酒屋・豊後・下町通りと交差する桜町交差点である。

以上より、『寛永長崎港図』は、長崎の都市形成における住環境の発展と継承について、その構造要素である①自然環境、②街路・公共空間、③町屋の配置及び住空間の視点から把握できる分析資料である（*5）。

4. 出島六町の民家と住環境

4.1. 出島六町の位置と住環境

出島六町は、中世・1571年に建築されており、横瀬浦町、外浦町、文知町、平戸町、大村町、島原町の六町で構成されている。

その地理的環境は、長崎港に突き出た岬の先端部分の波止場の位置から水平にラインを引いた位置から陸地に隣接する逆T字の領域にある。岬の稜線を基準に外浦町・大村町があり、海側に、横瀬浦町・平戸町、陸側に文知町・島原町が縦並びの町通りで構成されている。

出島六町は、中世以降の都市の街路である町通りが基準にあると考えられる。

4.2. 街路・公共空間

岬の教会と出島六町は、波止場の位置から水平にラインを引いた道路を介して領域が明確に2分されている。

4.3. 出島六町の民家

出島六町の民家の屋根は切り妻、平入の一階建てである。出入り口は、東入りと西入りの2タイプがある。平面形式は、長方形と正方形の2タイプがある。

間取りは、土間と店の間で構成される一間型であると考えられる。（注2, 3）

5. 内町の民家と住環境

5.1. 内町の位置と住環境

『寛永長崎港図』における内町（白色）は、出島六町と外町（赤色）の間に位置し、内町の領域としては、一の堀と三の堀とが該当する。

街路は、出島六町と同じ岬の稜線を基準にしており、この基準線は外町まで伸びている。しかし一方では、これと新たに交差する横軸の街路も形成されている。一の堀と接する横軸の街路であり、それが、基準になり陸に向かって段階的に街路が配置されていく。その結果、グリッドの町並みが形成されている。

5.2. 街路・公共空間

(1) 長崎奉行所と波止場

長崎奉行所は、本酒屋通りに接している。また、波止場から奉行所（玄関）までの街路は、出島六町の横瀬町・平戸町の通りがメインになっている。

(2) グリッドと空地

グリッドの町並みは、町屋と町屋の内部に共同の空地が現象してきている。

5.3. 内町の民家

内町の民家の屋根は切り妻・一階建ての平入である。出入り口に、北入りと南入りが現象してきている。平面形式は、長方形と正方形の2タイプがある。

間取りは、出島六町の民家と同様、土間と店の間で構成される一間型であると考えられる。

6. 外町の民家と住環境

6.1. 外町の位置と住環境

内町と外町の境界を定めたのが、中世の1597年（慶長2年）である。山の麓にある外町は、岬の高台にある内町を囲う形で構成されており、内町と外町は3の堀（1596年）の間で領域区分されている。また、外町の中島川（エッジ）には橋（パス）が、海から陸に向かって7つかかっている。すなわち、外町は、海から陸に向かって発展してきたことを読み解くことができる（*6）。

6.2. 街路・公共空間

街路は、出島六町・内町が岬の稜線を基準にしていたのに対し、町名の表記が示すように、横軸の通りが、海側から段階的に配置されている。その横通りの主軸は、眼鏡橋—酒屋町—豊後町—下町通りである。

また、この横軸と本興善町・豊後町の縦軸の交差点が、市中（内町・外町）のグリッドの基準点となり市中が構成されている。

6.3. グリッドと空地

一定の領域における複数のグリッド形成により、町屋の配置が囲い型のいわゆる、縦列・横列の交点が密着しているタイプの住区が構成されている。そして、この町屋の配列の真ん中に共同の空地が現象してきている。

6.4. 外町の民家

外町の民家の屋根は、内町同様、切り妻・一階建ての平入である。出入り口は、北入りと南入りがメインになってきている。平面形式は、長方形と正方形の2タイプがある。

間取りは、出島六町の民家と同様、土間と店の間で構成される一間型であると考えられる。

7. まとめ

7.1. 中世の長崎における都市形成と住環境

中世の長崎における出島六町と内町・外町とは、都市の構造が異なることを明らかにした。領域区分においては、岬の教会と出島六町とは街路を介して明確に領域の区分がなされていた。また、都市構造は街路・街並みは岬の稜線を基準にする町通りで構成されていた。

これに対して、内町・外町は街路が交差するグリッド構成であった。長崎奉行所はグリッドの中に配置されていた。

7.2. 中世の長崎における住空間（図3）

中世における出島六町・内町・外町の町屋は、土間と店の間で構成される一間型であったと考えられる。

屋根は切り妻、平入の一階建てである。一間型は、間口と奥行きが①2間×2間、②3間×2間の2タイプであった。

ただし、出島六町と内町・外町とは出入り口の機能が異なり、出島六町では東・西入りの町屋であった。これに対して、内町・外町においては、南・北入りの出入り口が現象していた。なかでも、外町では南入りがメインになっている。

また、公共空間においては内町・外町には、出島六町にはなかった、共同の空地が成立している。これらの現象は、奥行きを継承しながら住環境の質（快適性・保健性）を向上させながら都市・まちづくりを発展させてきたことを意味している。

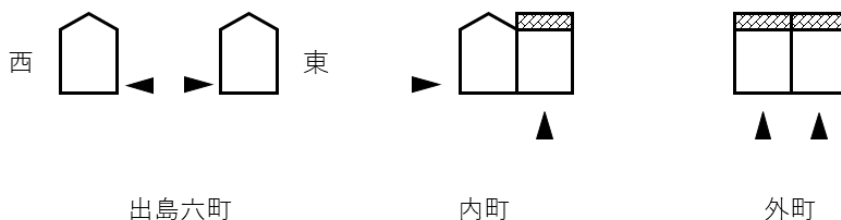


図3 町屋と町並み

謝辞

本論文をまとめるにあたり、共同研究者である柳 紀子さんには、調査のあり方、資料整理のお手伝いと貴重なアドバイスなど、細部にわたるご指導をいただきました。ここに感謝いたします。

関連文献

1. 佐々野好継, 山下恭徳. ランドスケープと住環境の構造-出島六町と長崎の奥性-, 長崎大学教育学部紀要, 第6集, 令和2年.
2. 太田博太郎. 日本建築史序説, 彰国社, 2007年.

3. 稲葉和也, 中山繁信. 日本のすまい—住居と生活の歴史—, 彰国社, 2008年
4. 寛永長崎港図ポスター, 長崎文献社
5. 山下恭徳, 柳紀子, 佐々野好継. 長崎の都市形成における自然地形と街路構成・施設および住空間の関係性に関する研究—出島六町と内町—日本建築学会研究報告, 九州支部第60号, 2021年.
6. 林一馬. 近世長崎の都市形成と景観的変遷. 第15回 都市形成・計画史公開研究会.2005年.